

# 博士論文の要約

名前 : Zulfikar Rachman (ズルフィカル・ラーマン)

学籍番号 : D202079

---

## インドネシア文化における依頼表現に関する研究

### —Tolong と Mohon を中心に—

依頼表現は日常生活において避けることのできない言語行為である。依頼表現では、話者と相手の関係によって表現の選び方が大きく異なる。社長のような自分より高位者相手に、友達のような親しい間柄で並行の関係にある相手に、後輩や子供といった自分より下位者相手に対する依頼表現の使用がそれぞれ異なる。これは、人間関係を維持するために相手に配慮して、最も適切な表現を選ぶ必要があるからである。また、依頼表現には、場面と依頼内容の負担に合わせ表現の選択を考えながら、依頼主が相手に要する行為を伝える直前に謝罪、前置き、事情説明など様々な要素が現れる場合もある。つまり、相手や依頼の負担等を考慮し、依頼を承諾するための戦略が複数ある。林 (2015:63)は、依頼相手との関係や相手が負うであろう負担などに対しての配慮も考慮し、スムーズに依頼したい内容を相手に伝えるという戦略には、文化的背景が大きく影響していると述べている。よって、日本文化やインドネシア文化は依頼表現の選択や戦略に影響すると考えられる。

#### 1.2.5. Kalimat Permintaan (要請文) について

インドネシア語の依頼表現は *kalimat permintaan* (要請文) や *kalimat permohonan* (懇願文) の二つに分類される。*Kalimat permintaan* は要求表現の程度が非常に緩和される。*Tolong* (助ける) という丁寧さを表す要素、あるいは *minta* (求める)、あるいは類似するニュアンスを持つ単語を用いる表現である (Rahardi, 2005)。相手に行為を求める表現なので、*minta* を使うことにより、直接的で無礼に感じる可能性がある。しかし、このような場合、*minta tolong* (助けを求める) が依頼表現として用いられ、聞き手より丁寧に感じるように発話される。この *minta* (求める) の部分は略されることが多い。

#### 1.2.6. Kalimat Permohonan (懇願文) について

Mohon (願う) は非常にあらたまった表現であり、自分より目上の人および会議のような公的な場面において頻繁に用いられている表現である。インドネシア語の依頼表現は *Kalimat permohonan* (懇願文) と呼ばれ、*mohon* (願う) という丁寧さを表す要素を使って依頼する表現を指す。*Kalimat permohonan* (懇願文) をさらに丁寧にするために、*-lah* が使われる場合もある(Rahardi, 2005)。

### 1.3. 先行研究

現代において依頼表現の研究は、日本語はもとより、英語圏の国とインドネシアではたくさんなされてきた。研究方法は小説、ドラマ等を活かすものに限らず、アンケート調査とインタビュー調査も行われてきていた。日本では依頼表現とジェンダー、依頼表現の丁寧の度合い、依頼表現の負担度などさまざまな視点から研究されてきた。古い書籍を対象にする研究も発達している。古写本を活かし、古写本を言語学的に研究する分野の中では *Historical Pragmatic* (歴史語用論) というものがあり、*Andreas H. Jucker* によって提唱された。しかし、日本ではこのような研究分野が比較的新しいものではない。古写本を活かすものとして、敬語史と待遇表現史の研究がなされてきた。例えば、森山 (2014)、森 (2018)、川瀬 (2018) は源氏物語、狂言の台本等を用い、日本語の敬語や依頼表現などの歴史的な研究を行った。

日本語における依頼表現の研究は発展しており、社会言語学のみならず歴史的 (通時的) な研究も多くなされている。マレーシア語を対象とした研究でも、依頼表現を中心にした研究も見られた。しかし、インドネシア語における依頼表現は *imperative* (命令、勧誘、依頼などの要求表現) の研究で触れられ程度で、Rahardi (2005) を参照したものは少なくない。依頼表現をより深く研究したものは非常に少なく、加えて、歴史的 (通時的) な変遷について研究したものはない。本研究は依頼表現を中核となす、特に *tolong* (助ける) と *mohon* (願う) を中心に、歴史的 (通時的) な視点を含む様々な観点から分析しようとするものである。次節では本研究の目的についてより詳しく説明する。

### 1.4. 研究の目的

本研究の目的は次の (1) ~ (4) のようになる。(1) から (4) までの目的を達成するために、歴史言語学、語用論、文化人類学、言語地理学、社会言語学、文献学といったさまざまな観点から調査を実施し、分析と考察を行う。本研究は、インドネシア語における依頼表現において中心的な役割を担う補助動詞 *tolong* (助ける) と *mohon* (願う) について、歴史

的（通時的）な変遷の過程と現在の使用実態に縦横からアプローチし、その全体像を説明することを目的としている。

- (1) インドネシア語の依頼表現において中心的な要素である補助動詞 *tolong*（助ける）と *mohon*（願う）の歴史的（通時的な）変遷過程を、形式と意味用法の両面から明らかにすること。
- (2) *tolong*（助ける）と *tolong*（助ける）等、*mohon*（願う）と *pohon*（願う）等の地域差を明らかにすること。
- (3) インドネシア語の *tolong*（助ける）と *mohon*（願う）について現代の用法を明らかにすること。
- (4) インドネシア語の依頼表現に *tolong*（助ける）と *mohon*（願う）が補助動詞として使用されるようになった文化的背景を明らかにすること。

## 1.5. 研究方法

本研究の方法は、(1) 歴史言語学と語用論の分析においては、古写本等を用いて依頼表現の事例を集め、それぞれの表現の形式と用法を分析する。古写本はマレー語で書かれた物語 (*hikayat*) やジャワ語の年代記 (*babad*) といった文献を取り上げる。マレー語を用いる *hikayat* (物語) とジャワ語を用いる *babad* (年代記) に記されている言語形式と事例を年代ごとに分類し、どのように依頼表現が変遷したのか、どういう場面で使用されてきたのか、1600年代～1800年代の依頼表現がどのように構成されるかを分析する。

(2) かつてジャワ島には強大な帝国があった。他の帝国を侵略した歴史もあり、ジャワ民族がインドネシアの各島に移住したという経緯がある。ジャワ語は他の地方言語にも影響を与えたと考えられる。例えば、スダ語の敬語はジャワ語の敬語の影響を受けたと報告されている。言語地理学の方法を用いて、ジャワ語がマレー語の依頼表現にどのような影響を与えたのかを含めて調査することとする。

(3) インドネシア語における依頼表現の現代における使い分けを明らかにするために SNS を活用する。SNS は比較的自然な会話が観察される媒体であるため、本調査における分析対象とした。筆者とインドネシア人や筆者以外のインドネシア人同士の個人的な SNS (WhatsApp、LINE、Messenger、Twitter) のやりとりに出現する依頼表現を中心にデータを収集、分析する。収集したデータは表に整理し、話し手と聞き手の関係に基づき、「下上」、「対等」、「上一下」、「不特定」といった項目に分類し、依頼表現の使い分けを分

析する。なお「—」の左側が話し手、右側が聞き手である。さらに、tolong（助ける）とmohon（願う）の使用実態、類似点、相違点を分析する

(4) インドネシア語の依頼表現は minta tolong（助けを求める）と mohon（願う）という標識で現れる。しかし、どうしてそれらの表現が使用されるのか、その背景については十分に研究されていない。本研究では pantun（四行詩）、tunjuk ajar（教訓）、聖典コーランを調べ、minta tolong（助けを求める）と mohon（願う）がどの場面で現れるか、どのような意味を持っているかについて考察する。Pantun（四行詩）と tunjuk ajar（教訓）はマレー族の文化を反映するため、研究対象にした。Mohon（願う）の使用の背景を考察するにあたり過去のインドネシアの社会と文化に関する先行研究を参考にして、分析する。

## 研究の成果

過去（1600年代から）と現代の minta tolong（助けを求める）と mohon（願う）の形式と用法の変遷について解明を試みる。ここではインドネシア語における依頼表現である tolong（助ける）と mohon（願う）の形式と用法がどのように変遷したのか分析し、変遷した要因についても考察する。過去と現代の依頼表現を「形式」と「用法」の視点から比較し、研究の成果をまとめていく。

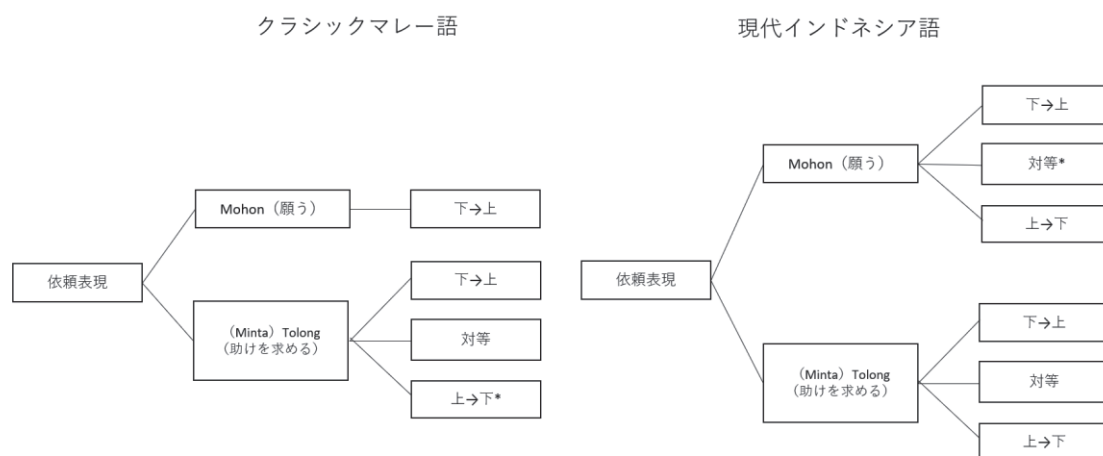
### 7.1. 形式の変遷

表 10 クラシックマレー語と現代インドネシア語における依頼表現の形式

番号	1600年～1800年のマレー語	現代インドネシア語
1	Minta（求める）	Minta（求める）
2	Meminta（求める）	Minta tolong（助けを求める）
3	Minta'（求める）	Boleh tolong（助けてもらっていい）
4	Pinta（求める）	Bisa tolong（助けてくれる）
5	Mohonkan（願う）	Tolong（助ける）
6	Pohonkan（願う）	Mohon（願う）
7	Bermohon（願う）	
8	Minta tolong（助けを求める）	
9	Tolong（助ける）	

インドネシア語における依頼表現は形式が変化していることが明らかになった。過去の依頼表現と異なり、現代インドネシア語における依頼表現は形式が簡略化した。その上、現代インドネシア語では依頼疑問型が現れ、現代インドネシア社会にはポライトネスがより重視されると言えよう。かつてと異なり、現代インドネシア社会は社会階級がなく、人と人の対人関係が曖昧になり、無礼にならないように相手に命令・依頼を断る余地を与え、より間接で丁寧な依頼疑問型がさらに重要になった。依頼疑問型を用いることによって無礼を避け、人間関係が円滑に進む。

## 7.2. 使用の変遷



\*一般的ではない

図 22 クラシックマレー語と現代インドネシア語における依頼表現の使用

クラシックマレー語と現代インドネシア語における依頼表現を考察した。クラシックマレー語のもの、特に *mohonkan* (願う) / *pohonkan* (願う) は使用が「下→上」に限定されたため、「社会階級による使い分け」が明らかになる。*Minta tolong* (助けを求める) の使用も、「上→下」場面よりも「下→上」場面に著しく出現するため、使用は「社会階級」に影響されたと考えられる。しかし、現代インドネシア語における依頼表現はどの相手にも用いられるため、「社会階級による使用」の制限があるとは言にくい。

現代インドネシア社会では王は各地域に存在するが大統領が国を統治している。インドネシアの王朝時代は各地域の帝国の敗北に伴い、帝国制度は終了した。よって、1600年代の社会と異なり、現代では「王家／貴族」のような社会階級システムがなくなり、「血筋による階級」から「場面による定型化」に移転したと考えられる。そして、現代インドネシア人社会ではお互いの対人関係がはっきりしておらず、曖昧になってしまう場合がある。インドネシアの社会が変化したため、依頼表現の使用も変わったのではないだろうか。

現代インドネシア語における依頼表現は「社会階級による使用」よりも、「場面に定型化した」と言える。第6章のアンケート調査では *minta tolong*（助けを求める）と *mohon*（願う）は前者がフォーマル／ノンフォーマル、後者が書面・スピーチという、使用の場面に傾向が見られた。フォーマルと書面の場面は *mohon*（願う）を愛好するのに対し、ノンフォーマルまたは日常会話では *minta tolong*（助けを求める）を多用する傾向が見られる。

### 7.3 まとめ

*Tolong*（助ける）と *mohon*（願う）について (1)～(9) のようにまとめることができる。

(1) 第3章では1600年代～1800年代の古写本を用い、クラシックマレー語における依頼表現を歴史言語学と語用論の観点から分析した。クラシックマレー語における依頼表現には *minta*、*meminta*、*minta'*、*pinta*、*mohonkan*、*bermohon*、*minta tolong*、*tolong* といった形式が存在する。それらの使い分けは1700年代のジャワ語と類似する。*Mohon*（願う）は王を中心に用いられるため、上下関係の観点からみると、使用は「下—上」の場面で使用された。*Tolong*（助ける）あるいは *minta tolong*（助けを求める）の使用は「対等」と「下—上」場面で出現した。また、*minta*（求める）は使用においては「上—下」が一般的だが、稀に「対等」と「下—上」の場面でも見られた。

(2) 第4章では *mohon*（願う）を文化人類学の観点から分析した。*Hikayat*（物語）では *mohon*（願う）／*pohon*（願う）という依頼標識が王や王系の人物に依頼する際に使用された。この使用は *dewaraja* 信仰に影響されたものと見られ、王 (*raja*) は神 (*dewa*) の降臨であるため、王は神と同等だと思われていたためだと考えられる。神である王に何かしてもらおう際の依頼表現は *mohon*／*pohon*（願う）のどちらかを選択する傾向が強い。

(3) 第4章では *minta tolong*（助けを求める）あるいは *tolong*（助ける）を文化人類学の観点から分析した。*Minta tolong*（助けを求める）あるいは *tolong*（助ける）を依頼表現として使用することは *tolong-menolong*（助け合う）文化が存在していることが背景にあるためと推測できる。「助け合う」という言葉はマレー族の *pantun adat*（風習の四行詩）に多用された。イスラム教の教えにも関連し、イスラム教徒はお互い兄弟のため、助け合わなければならない

らない。そのような文化的背景から、*minta tolong*（助けを求める）と *tolong*（助ける）を使うことによって相手に依頼するという表現が生じたと考えられる。

(4) 第5章では *tolong*（助ける）と *mohon*（願う）を言語地理学の観点から分析した。インドネシアの地方言語における「助ける」に相当する依頼表現は *tolong*、*tulung*、*tulong* という三つの表現が存在する。*Tolong*（助ける）はマレー語を使用する地域を中心に広がり、貿易によってインドネシアの東側まで普及した。*Tulung*（助ける）はジャワ語を使用する地域を中心に広がった。また、ジャワ帝国の影響を受けた地域には *tulung* が依頼表現として使用される。南スマトラ、西ジャワ（スندا語）、バリ島、西ヌサテウングラはかつてジャワ帝国との接触があったため、その地域の言語はジャワ語に接触し、影響を受けたと推定できる。スラウェシ島の地方言語でも[u]で発音するものも存在する。しかし、スラウェシ島にはジャワ語の古写本がなく、帝国間の接触が少ないため、ジャワ語の影響は少ないと考えられる。*tulung*（助ける）およびこれに類似したものは *tolong*（助ける）より古い言葉だと考えられる。このような語の中には *tulong*（助ける）も存在する。出現地域は非常に限定されるが、中心部から離れた場所で見られる。*tulong* はインドネシアの地方言語以外にも、フィリピンのタガログ語で見られ、依頼表現としての用法も似ている。オーストロネシア族はフィリピンからインドネシアへ移住したという報告があるため、*tulong*（助ける）は最も古い依頼標識だと考えられる。*tolong*、*tulung*、*tulong* 以外の依頼表現も各地方言語に見られる。

(5) インドネシアの地方言語では「願う」に相当する言葉が必ずしも存在するわけではない。マレー語とジャワ語とその両言語に影響された言語に *mohon*（願う）とそれに相当する言葉が存在する。*pohon*（願う／木）はインドネシアのバタム島で使用されることが分かった。バタム島以外では、マレーシアの各地域で使用されている。*Pohon*（願う・木）と *mohon*（願う）には地域差があると言える。一方、*pohon* はアニミズム時代の生命の木の信仰に関連する可能性もあるが、さらに検証が必要である。

(6) 第6章ではインドネシア語における依頼表現を社会言語学の観点から分析した。インドネシア語における *minta tolong*（助けを求める）と *mohon*（願う）の使用の選択は上下関係よりも親疎関係によって決定される。また、*minta tolong*（助けを求める）と *mohon*（願う）の選択は場面に定型化している。例えば、対一の場面では話者と相手が親しくないほど *mohon* を、またはフォーマルな場面ではより丁寧な依頼疑問型と *mohon* を使用する傾向が見られる。

(7) *Minta tolong*（助けを求める）と *mohon*（願う）の使用について前者は対一場面と「上一下」の場面で多用される。一方、後者は改まった表現のため、対一のやりとりよりも公的場面（スピーチ、書類等）や集団を相手にする時に多用される。しかし、友人同士では *mohon*（願う）を使うと、「冗談」と「非難」として機能する場合もある。

(8) 終章ではインドネシア語における依頼表現の変遷を分析した。クラシックマレー語と現代インドネシアにおける *minta tolong* (助けを求める) と *mohon* (願う) には変化が見られた。クラシックマレー語では「社会階級」によって使用がはっきり区別されたが、インドネシア語ではどの相手にも使用でき、「社会階級による使用」から「場面による定型化」へ変化したと言える。現代の依頼表現の形式も 1600 年代～1800 年代のものに比べて簡略されている。1600 年代～1800 年代のものには接頭辞と接尾辞の付加が見られるのに対して、現代の依頼表現では接辞が付加されなくなった。また、現代の依頼表現では疑問型のものが存在する。

(9) 1600 年代～1800 年代は明確な社会階級差があったため、依頼表現を区別していた。王朝時代が終了するに伴い、「社会階級」が消え、対人関係が曖昧になったため、依頼表現の使用にも変化が生じたと考えられる。相手によって依頼表現の区別がはっきりしないため、依頼疑問型というより間接で丁寧なものが重視され、使用されるようになると考えられる。